

山懐に抱かれた

(キョンジュ)

緑に包まれた寺をめぐる
自分自身を見つめなす旅へ

慶州の古刹をめぐる

韓国紀行
ソウルの先へ
Part 2



午後のやわらかな日射しに照らされた仏国寺の伽藍。

韓国ならではの建築様式
日本の寺院との違いを知る

韓国の名刹・古刹を巡礼する「三十三観音聖地巡り」という新しいスタイルの旅を、韓国観光公社が企画した。韓国の寺院は日本とどう違うのか。どんな魅力があるのか。三国時代から新羅の都があった慶州をはじめ、韓国東南部の寺院を訪れた。

釜山の金海(キム)国際空港から高速道路を走ること1時間30分。慶州のインターチェンジに到着した。車窓からはどこまでも続く青々とした田畑と、そのまわりを取り巻くように連なる山々が見える。現在では農業が主要の産業である慶州に、紀元前57年から統一新羅が高麗に合併される935年まで約1000年間も新羅の都があったなんて、まったく想像できないほどの大きな田園風景が広がっていた。

まずは世界遺産に指定されている名刹、仏国寺(ブルグクサ)へ向かう。バスから降りると、あたりにはうるさいほどの蟬の鳴き声が響いていて、なんだか夏休みに田舎に遊びにきたような気分だ。

最初に韓国の寺院特有の門である一柱門をくぐる。横から見ると柱が一直線に

仏国寺



どの寺院でも最初に通るのが一柱門。乱れた心を捨て仏の世界へ。一柱門以外にもいくつか門を通るが、通るたびに合掌して一礼するのが本来の作法。

建立年当時のままの石橋は、均整のとれた美しさを誇る。仏国寺には国内外から年間150万人もの観光客が訪れるが、この橋が一番の見どころだ。

韓国の寺院ならではの瓦の願掛け。瓦に願いごとを書き、新たに建物を建てる際に使ってもらう。1枚10,000W。ちなみにおみくじはない。



丹青の装飾は、韓国ではどの寺院でも見ることができる。目を凝らすと花や動物、僧侶などさまざまなモチーフが描かれているのがわかる。



仏国寺のそばのホテルから、美しい棚田を望む。歴史地区の建物は、瓦屋根で、かつ2階建てまで決められている。

海印寺



一柱門からゆるい上り坂の一本道が続く。標高1,430mの伽倻山にあり、歩いているだけで気持ちがいい。



ずらりと並ぶ八万大蔵經の木版。ほぼ完璧な状態で残されている。まるでひとりの人間がつくったかのような同じ筆跡で完成度が高い。印経は1枚5,000Wで売られている。

並んでいるこの門を境に、煩惱を捨てて俗世と別れ、仏の世界へ入ることになるという。日本の公式な仏教伝来は、538年に百済からもたらされたといわれているが、門の建築様式ひとつとっても韓国と日本とは異なるところが興味深い。

境内には小さな川が流れ、もみじや松、竹などがたくさん植えられていて、まるで公園を散歩しているようで気持ちいい。夏休み中のせいにか家族連れが多く、子供たちのしやぎ声がぎややかに響いている。

ほどなくして、751年の統一新羅時代につくられ、今も当時のまま残る国宝の石橋がかけられた紫霞門と安養門が見えてきた。その脇の道を進み、かなり急な階段を上がつて観音殿へ。安置されている観音菩薩に合掌。それから、観音殿の天井や軒下を美しく彩る丹青(タンジョン)と呼ばれる装飾をじっくりながめる。

丹青は韓国の寺や宮殿などに施される装飾で、青、赤、黄、白、黒を配してつくられている。エメラルドグリーンに近い明るい緑が基調になっているが、それでいてけばけばしさはない。あざやかでありながら木に馴染み、落ち着いた風合いだ。細かく塗り分けられ、蓮の花や龍などが描かれたこの美しい装飾は見飽きることがなく、なかなか目が離

せない。1000年以上も前には、日本の寺院にもこんなあざやかな装飾が施されていたのだろうか。

観音殿を後にし、もと来た階段に戻る。眼下に、暮れなずむやわらかい日の光が、伽藍の瓦屋根に美しい陰影をつくっていた。仏国寺は、8世紀頃には現在の10倍もの広さがあったというが、当時から変わることなく、こんな風に伽藍には光が注がれていたのだろう。そんな気の遠くなるようなときの長さに想いを馳せると、ふと一瞬、蟬の鳴き声が消えなくなり、境内に静謐な時間が流れているような錯覚を覚えた。

威圧感のない寺院には
自然と調和した美しさがある

4世紀後半、新羅、高句麗、百済の三国時代に中国から仏教が伝わった朝鮮半島。676年に新羅が半島を統一すると仏教文化が栄え、高麗時代(918年)には国教に定められた。しかし朝鮮時代(1392年)には儒教が重んじられ、仏教は弾圧を受け、寺院は山のなかへと逃れた。そのため、韓国の寺院は山中に建てら

通度寺



舍利塔のまわりを合掌しながら歩く。

れているものが多い。

慶州からそう遠くないエリアにも、山中にある名刹・古刹が少なくない。たとえば、溪流沿いの道に登った先にある海印寺(ヘインサ)は、伽倻山に抱かれるように広がる。この寺には1236年から12年かけて、のべ30人で行った八万大蔵經という木版が奉納されていて、世界遺産に指定されている。釈迦の教えを集大成したこの木版は、全部で8万1239枚あり、現在も使われているというからおどろきだ。また、合掌しながら最後までまわると願いが叶うという、庭に石で描かれた海印図(曼荼羅)回りもぜひ試してみたい。

また鷲棲山の南にある通度寺(トンドサ)には、仏舍利が安置されており、さらに釈迦のものに伝わる貴重な袈裟を見ることができ

一方、釜山から車で30分ほどの金井山にある梵魚寺(ボモサ)は禪寺として知られる韓国五大寺院のひとつ。通常2本である柱が4本並び、屋根が極端に低い独特な一柱門などが見どころだ。

とどこのお寺にも共通して感じたの

梵魚寺



は、それぞれの建物にまったく威圧感がないということ。傾斜のある山の地形に合わせて、伽藍を配置しているためと、突出して高い建物がなかったためだろう。山に抱かれているといった印象で、周囲の自然と調和している。境内を散策しているだけでも、韓国の自然を間近に感じられて、心身共に清々しさが溢れてくる。韓国の寺院めぐりは、韓国の豊かな自然を体感することでもあるのだ。そんな旅を、あなたも一度経験してみたいかがだろうか。

一柱門をくぐるのは梵魚寺にテンプルステイ(宿坊滞在)している学生たち。

2008年9月からスタート 三十三観音 聖地巡りとは?

韓国全土の観音殿がある寺院のなかから、韓国観光公社と韓国仏教文化事業団が三十三か所を選定。今回紹介した4つの寺院も含まれている。札所として認定された寺院を巡礼するという新しいスタイルの旅で、2008年9月以降、各旅行会社によってモデルコースが企画される。参加者には韓国観光公社から初回時に、オリジナルの朱印帳と参拝のしおりが贈呈される。韓国の奥深い魅力にふれるこの巡礼企画は、韓国観光公社公認。ツアーの詳細については「韓の国観光聖地推進事務局」に問い合わせを。



2008年8月に行われた開創記念ツアーには九州地方在住者を中心に約70名が参加した。

韓の国観光聖地推進事務局
【所在地】〒810-0001 福岡県福岡市中央区天神1-4-1 西日本新聞会館15階(株)西新広福岡内
【TEL】092-716-0091
韓国観光公社 東京支社
【所在地】〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-1-2 日比谷三井ビル9階
【TEL】03-3597-1717
【URL】http://japanese.visitkorea.or.kr

